

フロイトの症例ドラから考える逆転移の問題

佐々木 承 玄

The Problem of Counter-transference in the Case of Freud's Dora

SASAKI Jogen

I. は じ め に

参考文献にその一部をあげたが、フロイトの症例ドラに関しては、これまでに極めて多くの研究や批判がなされてきている。例えば、フロイトが青年期女子の心理を理解していないこと、クライアントであるドラよりも、彼女の父やK氏よりの立場に立っていたこと、家族の問題への配慮が足りないこと、ドラの治療動機への配慮や治療同盟が不十分であったこと、甘え・依存の心理をあまりわかっていないこと、性的な解釈など押し付けがましいこと、逆転移に関してあまりわかっていなかったこと等々。これら妥当と思われる批判がさまざまになされてきている。

本論文では、それらをふまえた上で、これまで十分に論じられてこなかったと思われる観点をに入れて論じたいと思う。その一つは、抵抗や転移・逆転移を論じる時にどうしても盲点になりやすいと思われる方法上の問題の指摘である。さらに、フロイトのドラ治療における逆転移やフリースとの関係の問題に関してはさまざまに論じられてきているが、フロイトの自己分析、その成果である『夢判断』、フリースとの関係とドラ症例との関連を、その問題性やテーマの関連に関してさらに踏み込んで論じたいと思う。

II. ドラ症例の概略

まず本論文に関係のある範囲において、ごく大ざっぱに概略を記す。

フロイトは、1900年10/14のフリースへの手紙で、次のように書いている。「新しい患者が来ました。……鍵をこじ開ける道具によって、なめらかに開かれつつある18歳の少女の事例です(Dietrichen glatt aufgehenden Fall)。」(この、鍵をこじ開けるというイメージも、別にフロイトの象徴解釈によらなくても、明らかに、性的に侵入するイメージである。)その年の大晦日を最後の面接日として中断するまで、3ヶ月弱の治療期間である。翌年1901年1/25の手紙で、「『夢とヒステリー』を昨日仕上げました。……これはヒステリー分析の断片で、二つの夢を中心に解明したもので、それゆえ本質的に夢の本の続きです」と述べている。この論文はその年にいったん印刷に回されるが、フロイトによって取りやめになり、4年後1905年に、新たに一部付け加えられ、「あるヒステリー患者の分析の断片」という題で発表された。その患者には、「ドラ」と

いう仮名がつけられており、「ドラの症例」と呼ばれている。(以下フロイト著作集5巻より引用)

ドラは、いくつかのヒステリーの症状をもつ18歳の女性で、裕福な実業家の父と、家事に専念している母と、兄の4人家族である。ドラの一家は、メラノに6歳から16歳まで住んでいたが、そこでK氏一家と親交があった。後に両家族ともウィーンに来る。ドラの父はフロイトに、「妻は私にとって何の意味ももたない」と述べているが、夫婦関係は破綻しており、父はK夫人と不倫の関係である。もっとも父は、「私はK夫人と気高い友情で結ばれている」と偽善的に語っている。ドラは父に、兄は母に、愛着をもっていた。父とK夫人の不倫関係は子どもたちにもばれており、ドラはフロイトにこう語っている。「僕ら子どもたちは、パパの行動を批判する権利はないよ、と兄はよく言っています。ママがパパをほとんど理解していない以上、パパが心をよせる女の人を見つけたことを少しも気に病む必要はないし、かえって喜ぶべきことかもしれない、というのです。私にもそれはわかるし、兄と同じように考えたいのですが、できないのです。私はパパを許せないのです。」(312頁)ドラは、母に対して拒否的で、「母を見下し、冷酷に批判し、その影響から完全に脱しきっていた」と書かれ、さらにフロイト自身、ドラと父との話から母のことを、「無教養で愚かで、……『主婦精神病』とでも名づけるような状態をていしている」(285頁)とひどく否定的なイメージで述べている。

ドラが14歳の時、K氏はドラを待ち伏せし、いきなりキスをした。ドラは激しい嫌悪感を感じたが、以後もK氏と普通の付き合いは続けた(フロイトはこの嫌悪感を、K氏に対する愛情の裏返しと解釈している)。さらに、フロイトに継続して治療を受ける2年前の夏(1898年)に、アルプス湖畔に避暑に行っていたK夫妻を、ドラと父は訪れたが、そこでK氏は再びドラに接近を試みる。K氏はドラに、「妻は私に何の意味もないのです」と言い寄るが、ドラはK氏に平手打ちをくわせる。ドラは父に、K氏が言い寄ってきたことを話すが、父はドラの言うことを信じなかった。またK氏は、ドラが半ばポルノ的な書物を読んでいることをK夫人から聞いて知っているし、ドラはそのような話を想像ででっちあげたのだ、とドラを中傷した。父はK氏を信じた。この一件はドラにとって大きな屈辱であった。(この時期、一度ドラと父はフロイトのもとを訪れている。)

そしてその2年後(1900年)のある日のこと、両親がドラの机の上か中に、ドラの自殺をほのめかす手紙を見つけ、驚く。さらに、父とドラとのやりとりの後、ドラが初めて失神発作を起こすにおよび、父は「権力づくの命令によって」ドラにフロイトの治療を受けさせた。父は言う。「私は、この突発事(アルプス湖畔の森の中でのK氏との一件)は、ドラの不機嫌、いろいろ、それに自殺したいという思いなどに責(Schuld)がある、と信じて疑わない。彼女は私に、K氏、そして特に以前彼女がたいへん尊敬していたK夫人との交際を絶つように求めた。しかし、私にはそれはできない。……私の固い頭を受けついでいるドラは、K夫人に対する憎悪をやめることができないでいる。彼女の最近の発作は、またこの要求を私に向けてきた後で起こったのだ。先生、彼女をここで、何とかよい道に戻すようにお願いします。」(290頁)こうして、フロイトの治療が始まった。

Ⅲ. 方法論上の問題

フロイトが治療に際し、どのような問題探求の態度をもっていたかの観点から論ずる。

1. 他者に対する非難と自己非難

フロイトがとるのは、クライアントが他者のことでさまざまに語ることを、クライアント自身の問題として引き戻しながら追求していく方法である。その根拠として次のように述べている。「自分の場合には感情的抵抗のために認識できない関連性を他人の場合には認識できるということが患者にはよくあることである。」(332頁)フロイトはこの観点を多用するが、それを以下に見てみる。

ドラは、上に述べた簡単な概要からもすぐに納得できることだが、父やK氏などをはじめとして大人への不信感が強くあった。ドラは、「パパは真面目ではない。その性格にはにせものの気味がある。自分の欲求の満足のみを考え、自分に一番特になるように、物事を処理する才能を持っている」(296頁)と批判した。「ドラの父とK夫人との関係をK氏が我慢している代償として、自分がK氏に引き渡されているのだ、という思いから逃れられなかった。彼女の父に対する愛情の背後には、このような利用のされ方への憤激のあることを感じる事ができた。」父が、K夫人との不倫関係は明らかであるのに、「気高い友情で結ばれている」などと偽善的に述べていることや、父がドラをフロイトに治療を受けさせに来た時の言葉からも、上のドラの思い、怒りはもっともなものであると思われる。父は自分の不倫の責任を棚上げし、不倫をやめさせようと言ってくるドラをまるめこみ、罪をドラに押しつけるために、ドラに治療を無理に受けさせたわけである。フロイトもこれを認めなかったわけではないであろうが、どちらかという、ドラ自身の態度、思い、その矛盾などに焦点をあてていく。(ドラ治療に対するフロイトへの批判として、治療が始まるきっかけとなっている父の態度や、大人の偽善に強い不信感をもっているドラに対してもっと理解を示すところから治療をスタートさせるべきであったという意見が多くなされているが、それは私もそう思う。)

フロイトは「他人に対する一連の非難は、同様の内容をもった、一連の自己非難の存在を予想させる。個々の非難を、それを語った当人に戻してみることこそ、必要なのである」(297頁)という態度で分析を進める。そして、ドラの父への非難が同様の自己非難に裏打ちされていることを見出す。「しかし彼女自身、まったく同じことをしていたのである。彼女はこの事件において共犯者であり、この関係の真の性格を示すあらゆる徴候を拒否していたのである。」つまり、ドラも、父とK夫人の交際をできるだけ助けるようにもしていたのであり、また、いくつかの話から、ドラはK氏を愛してもいたのであり、自分とK氏との仲がうまくいくようにも取りはかっていたのだと推論する。「事柄を自分自身の恋の情熱に都合のいいように処理してしまった、という非難——彼女が父に向けてはなった、この非難は——そのまま、彼女自身に送り返されてくることになった。」(299頁)フロイトは、このような点、方法を鍵として、患者の分析を深め、徐々に意識化を促していく。フロイトが述べたこの言葉は少なくともある程度は真実であり、また妥当な方法であると思われる。

が、ここに決定的な盲点がある。「自己非難から自分を守るために、他人に対して同じ非難を

あびせるこのやり方には、否定できない自動的なもの (etwas unleugbar Automatisches) がある。その典型は、子どもの『しっぺい返し』に見られる。すなわち、子どもたちを、嘘つきとして責めると、即座に、『お前が嘘つきだ』という答えが返ってくる。」(297頁) この節で述べてきたようなことは、フロイトが言うように「自動的に」そうになってしまうことであり、治療者自身にも全くあてはまってしまう。「自分の場合には感情的抵抗のために認識できない関連性を、他人の場合には認識できるということが、患者には極めて通常に起こることである」というフロイトの言葉を引用したが、これは患者のみならず、治療者にも「極めて通常に起こる」点が盲点である。ここに現れている問題が、抵抗や転移・逆転移などにおいて最も根本の問題であると思われる。フロイトの技法論が画期的であるのは、この問題を見据えていることであると筆者は思っているが、以下に見てみる。

2. 他者の抵抗と自分の抵抗のギャップ

フロイトは1912年の「精神分析療法中における夢解釈の使用」で次のように述べている。「治療に際して、意識的な目標観念を放棄し、繰り返し『偶然』と思える導きに完全に身をゆだねることは、被分析者にとってだけでなく治療者にとっても、ほとんど無理な要求であると私はわかっている。しかし、私たちの理論的主張を信じ、無意識の導きが諸関連を作りだしていくことに逆らわないようにすることを決心すれば、そのつど報われることを、私は請け合うことができる。」(著9・65頁) この「ほとんど無理な要求 (starke Zumutung)」へと立ち向かう気迫がフロイトの技法を貫いている。1912年の最も基本的な技法論「分析医に対する分析治療上の注意」においても、次のように述べている。「受け入れるのは困難なことであるが、被分析者はとりわけ次のことを学ばねばならない。すなわち、熟考 (Nachdenken) といった類の精神活動や、意志や注意力の努力によっては神経症の謎は解決されないこと、無意識やその派生物に対しての批判をやめることを命ずる精神分析の規則に忍耐強く従うことによってのみ神経症の謎が解決されることである。」そして次のことを請け合っている。「私は被分析者が自分自身について学ぶことを要望し、そのことで精神分析のすべての書物が教えてくれることよりも、多くの価値豊かなものを体得できることを請け合っている。」(著9・86頁)

1913年の「治療の開始について」で次のように述べている。「神経症の本質をよく知っている人は、人に精神分析を施すことに非常に有能な治療者でも、自分が精神分析を受ける対象となるやいなや、別人のように振る舞い、極めて強い抵抗を示すことがある、ということを聞いても驚かないだろう。ここでまたしても、心の深い次元 (psychischen Tiefendimension) の印象を受けるのであり、神経症は、分析的な修練が達していない心の層に根ざしている、ということに少しも驚かない。」(著9・90頁) 抵抗をどう扱うかが精神分析で最も重要なところであるが、他者の抵抗と自分の抵抗との間の途方もないギャップ、非対称性が、神経症の本質、および転移の問題の本質にある。これは理論的にも実践的にも根本の問題である。上の引用でフロイトは、2度も「驚かない」と言っているが、これは何度驚いても、また新たに驚かされ続ける体験を繰り返し、それでもまだ解決されていないという自覚からの言葉である。(自分にそのような盲点があることに新たに気づかされ、驚き、屈辱を感じたら、そのつどその屈辱を、誠実に治療を続けようとする志にかえていくしかないのであろう。)

フロイトは「心の深い次元」と表現しているが、この自他のギャップ、自分の盲点の問題は普通に「無意識」という言葉で表現されていることより、はるかに深い心の次元である。ここで「深い次元」というのは、「～的無意識」などと対象化して指すことができないことと関わっている。またフロイトは、「分析的な修練が達していない心の層」とも述べているが、この1913年の時期は既に、ユングの提案を受け、精神分析家となるためには自分自身が分析を受ける修練を積むことが必修とされており、単に「教育分析を受ければ解決される」「自分は教育分析を受けているから、その問題と取り組んでいる」などと言えるわけではない問題、そういう心の層であることがわかる。（逆転移に関する理解や技法が、フロイトの時代より今のほうが進んできているから、解決されてきている、などということとはあまり関係のない問題である。）フロイトの技法や理論は、すべてここを巡っている、と筆者は思っている。フロイトを批判したり、「逆転移」とか何とか言っても、あたかも自分は外側に立てるかのごとくに錯覚し続けがちであるところに転移や神経症の問題の特質がある。

フロイトの自己分析、その成果である『夢判断』の執筆、そしてドラ論文の執筆は、以上のような問題に対する深い取り組みを示していると思われるが、それは後に論じることにして、まず次に、本節で述べたことがドラ治療において具体的にどのように問題になったのかの一端を見てみる。

IV. ドラ治療における問題点

ドラの治療における問題点に関しては、参考文献にあげた論文などで多岐にわたって指摘されてきており、筆者が新しく指摘できる点は特にないが、その次の章で論ずる問題と関係のある点にしぼって以下に述べる。

1. 本当に自分に対して真剣であるのか（あるいは遊び、代用、自己満足なのか）という問題

ドラの治療の過程で何度もこのことがテーマとしてあがっている。

そもそも父がドラにフロイトに治療を受けることを強いた動機からして、父とK夫人の不倫関係を裂こうとするドラをまるめこもうというものであったし、ドラは「パパは真面目でない」と訴えている。そして「父とK夫人との関係をK氏が我慢している代償として、自分がKに引きわたされているのだ、という思い」から逃れられず、「このような利用のされ方への憤激」を何度か表現している。

また、ドラの家庭教師（未婚の女性）も重要な人物として登場している。その家庭教師はドラに対して親切にしていたが、実はドラの父に恋しており、その父に愛されるためのダシとしてドラは利用されていることに気づく。「ドラは、家庭教師にとって自分はどうしてもよい存在であって、自分に寄せられていたと見えた愛情も、実は父に向けられたものであることに気づいた時、初めて怒った。」(298頁)そして、その家庭教師を解雇させた。

ドラは、かつてはK夫人に対して深い愛情を寄せており、例えば泊まる時には、K氏を別の部屋で寝かせ、ドラとK夫人は同じ寝室で寝たり、「彼女たちが話し合わぬことは何もなかった」ほどであるが、湖畔での一件の後、「K夫人がドラを裏切り、中傷したのだった。」(318頁)「か

つて家庭教師との間に起こったのと全く同じことが、再び起こったことになる。すなわち、K夫人もドラのことを、その人柄のゆえに愛したのではなく、彼女の父のために愛したにすぎなかった。K夫人はドラのことを一瞬のためらいもなく犠牲にし、自分とドラの父との関係が乱されるのを防いだのである。」(318頁)ドラは、かつてこれらの屈辱的な体験をしていたため、父がドラをフロイトのもとで治療させようと寄こしたのも、父がドラを犠牲にして自分の不倫関係を守るためであることに、よけいに敏感になっていたのである。

父親、K氏に関してだけでなく、K夫人と家庭教師の間でも、自分という人間が大事にされたのではなく、別の人の気をひくためのダシに使われたという苦い経験があったのである。このような不安、思いはフロイトに対しても抱かれ(転移され)てくることは、意外と言うよりむしろ自然なこととも言えよう。フロイトは次のように述べている。「彼女の空想の中では、私が父親の代理だったことは明らかである。また彼女は常に意識的に私を父親と比較し、父親が常に隠し立てとまわりくどい表現を好んだために、私が彼女に対して全く誠実であるかどうかを、不安そうに確かめようとするのだった。」(363頁)

ドラの第一の夢は、K氏との湖畔での出来事の頃3晩続けて見た夢で、さらにフロイトとの治療が始まってからにも再び見られた夢である。その夢の解釈の中心をフロイトは「パパ、子どもの頃のように私を守って下さい」(328頁)と父から保護してほしい願望として述べている。フロイトは、「適切な時期に転移を処理することができなかった」と述べているが、「彼女がK氏に復讐しようとしたのと同じように私に復讐し、K氏にあざむかれ捨てられたのと同じように私を捨てたのである」ということになり、治療は中断する。そして次のように述べている。「最初の夢が現れたとき、そのなかで、かつてはK氏の家を立ち去ったように彼女がこの治療から立ち去りたいと、自ら警告を発したとき、私は私自身に警告を発しなけりばならなかったし、彼女には次のように指摘すべきだった。『今こそあなたはK氏から私への転移をおこしたのです。』」(363頁)が、ここには、相手の転移に気づき、それを指摘すればいいという以上の問題がひそんでいると思われる。

2. 復讐ファンタジー(それと同時に、もう一度言い寄ってきてほしいという思い)

フロイトは、第二の夢の解釈を終え、ドラに「満足の意」を表明する。「私が満足の意を表明したさい、ドラは侮蔑的調子で答えた——いったいどれだけ多くのことがこの結果に現れてきたというのでしょうか。」(353頁)そして次の回に中断を申し出られる。ここには解釈と関係性をめぐる重大な問題がひそんでいると思われるが、それは次章で見ることにする。

この中断を申し出た回(1900年12/31)は重要なので少し詳しく述べる。フロイトはドラに、いつその決心をしたのかと尋ねると、ドラは2週間前だった、と答える。「その言葉はまるで、女中か家庭教師に対する2週間前の解約通告と同じように響きますね。」「解約した家庭教師は、湖畔のLを訪れた時に、K氏宅にいました。」ドラは、このことを初めて述べた(それまで何度も湖畔での出来事が話題になっていたのにもかかわらず)。ドラの話によると、その家庭教師は、ドラに解約された後、K氏の子どもの家庭教師となっていた。湖畔での出来事の1、2日前に、その家庭教師は、ドラに次のことを話す。その家庭教師はK氏から「私にとって妻は何の意味もないんだ」という言葉で言い寄られ、それを受け入れ肉体関係をもつが、しばらくすると気にか

けられなくなってしまう、K氏を憎むようになったが、それでも再びK氏が言い寄ってこないかとしばらく待っていたという話である。要するに、そのかわいそうな家庭教師は、K氏に遊ばれ、捨てられたのである。K氏はその時すでに、ドラに狙いを定めており、ドラに「私にとって妻は何の意味もないんだ」と同じ言葉で言い寄る。これではK氏が平手打ちを受けても当然である（K氏にしたら、家庭教師が自分に遊ばれ捨てられた話をドラに打ち明けていようとは思わず、同じ言葉でドラを口説き落とせると思ったのであろうが）。当然でないと思われるのは、ドラがこのことを最終回まで話さなかったことと、やはりドラもその家庭教師と同じように、2週間たってから親にK氏から言い寄られたことを話したことである。しかもドラは、「なぜ私はそのことをすぐ両親に話さなかったのでしょうか？」と自分からフロイトに尋ねている。フロイトは、その家庭教師が、K氏が愛情を再び自分に向けてくれることを希望し待ったように、ドラも、K氏がもう一度新たに求愛してくれることを期待して待っていたのだと指摘する。「そこからあなたは次のような結論を出したかったのでしょうか。その家庭教師の場合とは違って、私の場合は遊びではなく、真剣だったという結論を。」ところが、K氏は、ドラにもう一度言い寄るところか、ドラを中傷した。（さらに父もドラを信じてくれず、K夫人にも中傷されるのであり、これではドラが大人に対して不信感をつのらせるのも納得できる。）「さて、私はあなたが何を思い出したくないのかもわかります。それは、K氏の求愛が真剣なものであり、結婚するまでは、K氏は自分を見捨てないだろう、とあなたが想像したことです。」「ドラは私のいうことに耳を傾け、いつものようには反論しなかった。彼女は心を動かされたように見え、愛くるしい心のこもった新年の挨拶を述べて別れを告げ——二度と来ることはなかった。」このようにして、治療は中断する。

フロイトは、第二の夢の解釈で「復讐ファンタジー（Rachephantasie）」ということを全面に出している。つまり、ドラが父を見捨てて、家を去り、父は娘恋しさに胸がはりさけんばかりになり、そして死んでいく、というファンタジーである。ドラに復讐ファンタジーがはたらいていたことと、K氏が自分に対しては遊びでなく真剣であったことを空想したことを抑圧したというのは妥当な考えであろう。

フロイトはその復讐ファンタジーが自分に転移されたと考えた。「私はドラがもう二度と来ないことを知っていた。疑いもなくそれは復讐行為であった。彼女は全く予想のつかないやり方で、治療が幸福な結末を迎えようという私の期待が最高潮に達したとき、治療を中絶して、この希望をなきものにしてしまったからである。」(357頁)

3. フロイトの側にあった（復讐）ファンタジー

フロイトのとった行為にも復讐の側面が多くあったのではという点もこれまでさまざまに指摘されてきているが、代表的な点に少し触れておく。

・ドラという仮名に関して

まず、ドラという仮名に関して、『日常生活の精神病理学』で、次のように述べている。（著4・205頁）まず、この症例の仮名をつけるにあたって、ドラという名前しか思い浮かんでこなかった、と述べている。フロイトは、妹のローザが、ローザという女中を雇っていたが、同名で紛らわしいので、ドラと呼んでいることに思い当たる。フロイトは、それを知った時に、「自分の名前さえ名のることができないなんて、かわいそうだな」と言った。そのことがあり、「自分の名

前を名のることができない」症例の女性の名をつけようとしたときに、ドラしか浮かばなかった、と述べている。さらに、女中の名前をとったということに関して、症例ドラとの内容上の連関にも触れている。「この女性患者の症例では、ある女性の家庭教師が、治療の経過によって決定的な影響を及ぼしていたのである。」症例のドラが、治療を今日で最後にするとフロイトに告げた時、フロイトはまるで家庭教師が解約を告げられた時のような不快感を感じていた。妹の女中の名をつけることによって、その復讐をはかったのであらうと思われる。(さらに言えば、ドラは、家庭教師はK氏に遊ばれ捨てられたが、自分に対しては真剣なはず、という期待を強くもっていたことが重要な点であったが、フロイトが妹の女中の名をとったことには、「お前も同じく遊ばれ捨てられたんだ」という復讐心もあったことも考えうる。)

・ドラ再来時(1902年4月)のフロイトの態度

1902年3月にフロイトは、『夢判断』でも何度かテーマになっているが、念願だった号外教授の肩書きを手に入れた。それは新聞にも載った。『日常生活の精神病理学』(著4・223頁)で、そのことと関連する復讐ファンタジーを語っている。「私はこの教授の肩書きをもらって、ほんの数日後、旧市内を歩いていて、突然、ある夫婦に対する子どもっぽい復讐ファンタジーにとりつかれた。」その数ヶ月前に、フロイトはその夫婦の娘を診察し、フロイトは治療を継続したいと思ったが、その夫婦はフロイトの治療を断ったばかりか、外国の催眠術治療の權威のところへ行くことをほのめかした。フロイトが空想したのは、その外国での治療が完全に失敗し、その夫婦が娘を全部フロイトにまかせるから治療してくれと頼むところであった。フロイトは空想の中で次のように言って、その夫婦の頼みを拒絶する。「ああ、そうですか。私が教授になったので、私を信頼して下さいですね。教授の肩書きをもらったからといって、私の能力は前と全然変わっていませんよ。講師であった私が信頼できなかったのですから、教授になった私でもお役には立ちますまい。」その空想は、「失礼いたします。先生」という挨拶の声で中断された。「眼をあげてみると、たったいま依頼を拒絶して復讐を遂げたばかりのその夫婦が、私とすれ違うところであった。」フロイトは遠くからその夫婦が眼に入っていたのであるが、それは意識せずに、この復讐ファンタジーをつくりあげていたのだった。

その夫婦への復讐は、フロイトのファンタジーの中だけで成し遂げられただけだが、ドラは(復讐の餌食になるとも知らずに)実際に、フロイトが教授になった記事が新聞に載った2週間後に、もう一度治療を受けたいといって、フロイトを訪れた。フロイトは、先のファンタジーの中で夫婦の申し出を拒否して復讐を遂げたように、「彼女の表情を一目見るなり、私は彼女の要求が真剣なものではないということを読みとることができた」(365頁)ということで、ドラの申し出を拒否する。最初の治療が、ドラ本人は嫌がっていたのを、父が無理に連れてきて、それを引き受けたことを思えば、今回は、ドラが自ら治療を頼みにきたのに、それを拒否するのは、やはり復讐ファンタジーがはたらいているからであらう。(ドラの訴えの中心に、「自分を真剣に受け取ってもらえない」ということがあったことを思えば、一目見て、「真剣でない」と判断された点も、古傷を新たにえぐられるような屈辱だったのではないだろうか。)

その時、ドラはフロイトに、その後のK夫妻とのことを語ったが、ドラは「彼らに復讐を遂げ、彼女の問題は満足すべき結末にいたった」ということである。ドラはK夫人に、父と不倫関係だったことを認めさせ、K氏には、彼が拒否した湖畔での出来事を認めさせ、自分の無実を証明する

知らせを父にもたらした。その後、ドラはK夫妻との関係を絶ってしまった。ドラが、大人の偽善を暴き、復讐するためにあがいた様子が窺われる。(が、土居も指摘しているように、心の虚しさは、変わらなかったのではないだろうか。)

ドラがフロイトに再び治療を受けたいと思ったきっかけは、しばらく前に顔面神経痛にかかり、日夜、悩まされ続けたからである。フロイトは、いつからか、と問うと、ドラは、きっかり2週間前からだと答えた。「私は微笑まざるをえなかった。ちょうど2週間前、彼女が新聞で私に関する記事を読んでいることを指摘することができたからである。彼女もそれを肯定した。」(366頁) 顔面神経痛にかかって苦しんでいるドラの顔と、微笑んでいるフロイトの顔。強烈な対照である。「顔面神経痛の訴えは、いわば自己懲罰の一つであり、彼女がかつてK氏を平手打ちしたことに對する後悔の念であり、そこから生じた私への復讐転移(Racheübertragung)である。」この文で、自己懲罰と後悔の念というのは理解できるが、顔面神経痛が復讐転移であるというのは、そのままでは理解しづらい。これは、「フロイトのドラに対する復讐転移である」とすると理解できる。ドラの第二の夢で、ドラは父を見捨て、そのため父が死んでいるが、見捨てたとしても、それで相手が「あんな奴と手が切れて良かった」と心から喜んでいたら復讐にならない。見捨てるという形での復讐は、そのことで相手の傷つく度合いによって復讐の成果が決まる。ドラは、新聞でフロイトの教授になった記事を見たことをきっかけに、顔面神経痛になった。そこでの心の底の動きは複雑だろうし、よくはわからないが、とにかくフロイトは、自分のことを思い起こしたのがきっかけでドラが顔面神経痛になっているという復讐の成果を目の当たりにして、満足を感じ、心に余裕もできたのであろう。ドラに、許しを与える。「彼女がどんな種類の助けを私に求めようとしたのかは、私にはわからないが、彼女をもっと根本的に病気から解放するという満足(Befriedigung)を私から奪ったことを彼女に許す(verzeihen)と約束した。」強烈な「許し」である。ドラは現に顔面神経痛で苦しんでいるわけだし、その病気から解放する満足を選んでよかったはずであるが、フロイトは、自分はそれを治さないというほうの満足を選んだ。

V. フロイトの自己分析との関連

1. ドラ論文と『夢解釈』

フロイトは1901年1/25のフリースへの手紙で、『『夢とヒステリー』を昨日仕上げました。……これはヒステリー分析の断片で、二つの夢を中心に解明したもので、それゆえ本質的に夢の本の続きです』と書いている。ドラ論文でも、「この研究は、夢の解釈が(ヒステリー)治療歴中にどのように組み込まれるのか、それからまた、夢解釈の助けによって、記憶欠損の補填と症状の解明がどのようにして得られるのか、を示すのに特に向いていると思える」と述べ(279頁)、1899年11月に出版された『夢解釈』との連関を述べている。土居(1997)は、「通常、1900年に出版された『夢の解釈』を以て、精神分析の土台石が築かれたごとくいわれるが、これはいわば理論面に関することであって、治療としての精神分析に関する限り、上述の1905年の論文を以て、その基礎工事が終了した、といって過言ではないであろう」と述べているが、筆者もそう思う。

その両方に共通しているテーマは、(夢や症状の)解釈と、(治療関係をはじめとするさまざまな)関係性の問題である。ドラの治療においては、第二の夢の解釈を終え、フロイトは解釈に成

功したと感じ満足を表明するが、治療としては中断し、成功とは言えないわけで、フロイトに問題として突きつけられ、「転移を扱う作業は全治療の中でもっとも困難な部分である」(362頁)と自覚され、生涯のテーマとして取り組んでいくことになる。

解釈と関係性の問題は、フロイトの自己分析、その成果である『夢解釈』においても、中心的なテーマとなっていたとも言える。イルマの夢の解釈のところで、フロイトは次のように述べている。「私の任務は患者の症状の隠された意味を伝えることで果たされるのであり、患者がそれを受け入れるかどうかまでの責任はないと当時思っていたが、それは誤りだとわかった。」(著2・94頁)その誤りに気づき、解釈や意味を伝えるだけでは済まされない問題があることを自覚したわけである。「イルマの夢」の分析をはじめとするフロイトの自己分析は、外側からクライアントを見て、解釈を与えたりなど治療を施すという立場では済まされないことを自覚し、そこに関係性そして治療者自身の無意識まで含めた態度がいかに関係しているかに取り組んでいく過程として見ることもできる。そこには本論文のⅢ章で触れたような途方もない問題があり、その問題へ取り組む姿勢が精神分析の根本の特徴であると思う。

フロイトは、「イルマの夢」に入る直前にこう述べている。「私はここで読者にお願いせねばならないが、読者はかなり長い時間、私の関心を読者自身の関心として、私の生活の極めて細々とした細部にまで、私と一緒に沈み込んで (versenken) いただきたい。なぜなら夢の隠された意味を知ろうとする関心は、絶対にそういう転移 (Übertragung) を必要とするからである。」(著2・91頁) 解釈を外側から理解しようとするのでは夢の意味はわからないこと、夢の意味を知ろうとするにはこの引用文で示されているような決心と行為が絶対に必要であることが明言されている。ドラ論文でも、「夢の諸問題への没頭 (Vertiefung) は、ヒステリーや他の神経症の精神過程を理解するための不可欠の前提である」(279頁)と明言されている。肝に銘記したい。

2. 症例ドラと関連するフロイト自身の夢のテーマ

テーマや問題点を指摘するだけでは不十分で、上の引用文にあるような態度をもって臨んでいかなければ大事なことはわからない、というのが筆者の一番主張したい点であるが、その参考にできればと思い、いくつかテーマを指摘する。

ドラの治療において、「自分のことを真剣に思ってくれていないのではないか (代用ではないか)」「誰の Schuld (責任・罪) か」「治療の際の復讐心」などがテーマとなっていることを見た。これと全く同じテーマが、イルマの夢の分析をはじめとするフロイトの自己分析でも中心の問題となっている。「イルマの夢」(イルマは仮名で本名はアンナ・リヒトハイム)というのは、フロイトが「精密に解釈を試みた最初の夢」で、そのヒステリーの治療に部分的に成功して治療を終え、その後で見た夢である。イルマの夢をはじめとする解釈は、イルマという患者を治療している際にフロイトがその時点では意識しないでいたことに気づいていく過程とも言える。(Anzieu 他、実にたくさん論じられてきている。)

フロイトは夢の中でイルマに、「あなただけの Schuld (責任) です」と言うが(あるいは実際に言ったとも述べている)、その夢の分析の過程で、クライアントに責任を押し付けた背後にいかに関心の復讐心などさまざまな思いがひそんでいたかに気づいていく。フロイトの文章を直接読んでほしいが、イルマやドクター・M (ヨセフ・ブロイアー) などに対して、そこまでやるか、

と驚くくらいの徹底的な復讐心が示されている。「不都合な3人を追放して、私が好んで選ぶ別の3人がいてくれたならば」(著2・103頁)など、別の人物に「代用したい」という思いもさかんに出てくる。「私はイルマを、イルマよりもっと利口で従順な別の女性で代用することによって、私のいうことをきこうとしないイルマにも復讐する」とあるが、「代用して復讐する」という表現も何度も出てくる。

フロイトは1908年1/9のアブラハムへの手紙で、イルマの夢に登場するのはアンナ、ゾフィ、マティルデの3人であったと述べている。イルマ(アンナ・リヒトハイム)を別の女性(ゾフィのこと)で代用して復讐する、と解釈で述べていたが、意識して自分の家に代用をこしらえた、というわけでもなかろうが、自分の娘をその二人にちなんで、ゾフィ、アンナと名づけている。イルマの夢の解釈で、フロイトはヨセフ・ブロイヤーに対する敵対心をかなり表現していたが、「Non vixitの夢」では、「あいつはそもそもこの世に存在しなかった」と言いながらヨセフを睨み殺すという復讐がなされている(このヨセフは、ゾフィの夫であるヨセフ・パネットであるがブロイヤーも重なっていることをフロイト自身述べている。著2・400頁)。また自分の子どもの名づけ方を思い起こしながら、「代用できない人間はいない。……失ったものはすべてまた戻ってくる」(著2・400頁)という、すさまじい解釈を書いている。

「代用して復讐してはいけません」とか「クライアントその人に真剣に対しましょう」などということはもちろん大事であるが、意識的・道徳的な反省だけでは済まされないようなことが、治療や自己分析で問題となっている。上にあげた引用だけだとフロイトがすごい悪人のように思えるであろうが(そして実際そうだと筆者も思うが)、その自分の悪に取り組む姿勢、それを語る語り口に、本当に誠実な精神分析家として自分を確立していくフロイトの秘密がひそんでいると思う。

3. ヨセフ・ブロイヤーのアンナ・Oの症例(ドラ・ブロイヤー誕生)

フロイト自身が後年繰り返し語っているように、精神分析のはじまりにあたっの重大な出来事は、ヨセフ・ブロイヤーによるアンナ・Oの症例である。この症例をブロイヤーから聞き、フロイトが(転移などの問題を)どのように考え、行なったかが、精神分析の出発点となっていると言える。Anzieu(1986)によれば、イルマの夢をはじめとするフロイトの自己分析と、アンナ・Oの症例の関連も指摘されている。

『ヒステリー研究』のブロイヤーの記述は、科学的な論文を目指そうとして客観的な記述が心がけられている。が、そこに記述されていない重大な出来事があり、Jones(1961)などによって次のように指摘されている。ブロイヤーがアンナ・Oに入れ込みすぎるのを見て、ブロイヤーの妻マティルデが激しく嫉妬し、症状が良くなってきたことと妻の嫉妬のためにブロイヤーは治療を終えることにした。フロイト自身がどのように受け取ったかが極めて重要なことなので、後年1932年6/2のツヴェイクへの手紙を引用する(著8・413頁)。「彼女のすべての症状が克服されたのち、ある日の夕方、彼は再び彼女のところに呼ばれると、彼女は下腹部の痙攣を起こしてのたうちまわり、錯乱していたのです。どうしたのかと問われて、彼女は答えました、B博士からもらった子どもが今生まれてくるのだ、と。」つまり、アンナ・Oはブロイヤーの子どもを身ごもったと空想しており、陣痛まで起こしたのである。Jonesによると、ブロイヤーは催眠術

をかけてその場をおさめ、妻マティルデとともに海外に逃げたということである。

ちなみにアンナ・Oが治療を受けていた期間は1880年12月から1882年6月であるが、ちょうどその時期マティルデは妊娠しており、1882年3/11に娘を出産し、その名はドラである。フロイトは後に、その彼女と連絡を取っていることを、上述の手紙で述べ、しかも、ドラ・ブロイアーのことを、「その治療が済んで間もなく生れ、より深い諸関連にとって重要でなくはない人！」と表現している。フロイト自身がこの関連を重要視しているのであるし、本論文の症例の患者はドラ・ブロイアーと同年1882年11/1に生れているのであるから、ドラという仮名をつけたことには、ブロイアーとアンナ・Oやマティルデをめぐるさまざまな出来事の中で生れてきた子どもというイメージが働いていたと言ってよいであろう。(さらに Mahony によれば、症例のドラは、フロイトに治療を受けている頃リヒテンシュタイン通りに住んでおり、そこはかつてアンナ・Oが住んでいた通りということである。)

4. ヨセフやフリース、及びその背後の女性たちへの愛憎というテーマ

上述のアンナ・Oの一件をどう受け取るかということをはじめとして、『夢解釈』では、ヨセフという名の人物、およびその背後の女性への愛憎というテーマが頻出している。フロイトもそれに気づき、ヨセフ・パネトを睨み消す Non vixit の夢の脚注で、次のように書いている。「ヨセフという名が私の夢のいくつかでいかに大きな役割を演じているかに読者は気づかれたであろう。ヨセフという名を持った諸人物の背後に私の自我は夢の中では特にたやすく身をしのばせることができる。なぜならヨセフは聖書中でも有名な夢解釈者 (Traumdeuter) だからである。」(聖書で、族長ヤコブの息子ヨセフは夢解釈でエジプトの首相の地位にまで昇るが、フロイトもヤコブの息子であり、上の引用文でわかるように「夢解釈」にこだわることにヨセフへの同一化はたらいっている。)

イルマの夢からして、ヨセフの背後の女性が中心テーマの一つとなっている。フロイトは長女をブロイアーの妻の名を取って、マティルデと名づけている。イルマの夢の連想で、「私自身の医師としてのある悲しい体験を思い起こさせる。かつて私は、当時まだ無害だとされていた薬品を継続的に投与して、ある女性患者に重い中毒症を起こさせた。……死んだマティルデ」と実名を出して書いている。ブロイアーの妻の名を娘につけてかわいがる一方で、同名の患者を死なせてしまっているのである。一体自分は何をしているのか、というような葛藤の深まりがフロイトの自己分析を貫いている。

ここで、長女をマティルデと名づけたのは、ブロイアーの妻への愛情からだ、というのは容易に見てとれるが、同名の患者を死なせてしまったことはどういうことなのか、という疑問も起きよう。意識して殺したのなら犯罪であるが、そうではない。「無意識的にマティルデへの愛と同時に敵意があり、……」などと言おうと思えば言えようが、「無意識」というのも困難な問題をはらんだ言葉である。例えば、イルマの夢の解釈は、フロイトがイルマに対して、「あなただけのせいです」と言った時、その時点で意識していないところで、どのような思いや出来事がいかに関連していたかを明らかにしていく過程とも言える。フロイトは「夢は願望充足である」と言うが、自己分析は、どのような願望が自分をつきうごかしていたのかを発見していく過程でもある。

上の引用で、フロイトが、ドラ・ブローイアーのことを「より深い諸関連にとって重要でなくはない人！」と書いていたが、フロイトは「！」のマークをよく使う（なぜか翻訳では省略されることが多く残念である）。イルマの夢の解釈で、イルマをゾフィで代用したいと思っているが、ゾフィもまた未亡人であったことを思い起こした箇所でも、「！」を使っている。（著2・101頁）1908年1／9のアブラハムへの手紙で、イルマに重なって現れているのが、マティルデ、ゾフィ、アンナという女性であることを述べた箇所でも、「私はその3人の名をとって娘を名づけたのであり、しかも私の娘はその3人だけなのです！」と書いている。ここには自分の願望や、それが家族をはじめとする重要な人間関係にいかんにか反映しているのかに、驚きながら気づいていく過程が表現されている。そのような過程を共にしようとする努力なしに、「無意識」という語を外側から説明する概念として用いることは安直であると思う。

フロイトの自己分析において、フリースとの転移関係が極めて重要であったことも、しばしば指摘されてきている。フリースへの愛憎に加えて、フリースの背後の女性というイメージも重要な役割を果たしている。イルマの夢の解釈のところでも、イルマの鼻をフリースに診てもらったことを述べているが、当時フロイトは多くの女性患者をフリースに診てもらっており、それが重大なテーマとなっている。（筆者はフロイトの自己分析を中心に扱った別の論文を執筆中であるので、本論文では省略する。重要なテーマだけをあげると、エンマ・エクシュタイン事件、フリースの娘にパウリーネというフロイトにとって重要な名をつけさせたことなどがある。）

これは単に頭だけのことでなく、実際の重要な人間関係に現れてくるところに転移の特徴がある。イルマの夢の時点では、「世間が私の学説を無視しても、その人の賛同を得さえすれば満足だと思う人物」（著2・101頁）とまで評価していたフリースとの関係は、自己分析の過程で変化してきて、『夢解釈』出版後間もなくして決裂する。イルマの夢の解釈で、イルマをゾフィで代用したいという思いが述べられていたが、Non vixit の夢で、実際は既に死んでいるゾフィの夫ヨセフをフロイトは睨み殺し、娘にゾフィなどと名をつけていることを思い起こし、「代用できない人間はいない」と解釈していた。『夢解釈』出版後3日もしないうちに、そのゾフィから絶交されている（フリースへの1899年11／7の手紙参照）。フロイトはイルマの夢の解釈で、ゾフィに関して、「彼女のほうがイルマより利口で、だから私の言うことを良くきくだろう。やがて大きく口を開いた」（著2・96頁）など書いているが、そのような解釈よりも、絶交されるという行為のほうが、痛切な意味をもっている。

精神分析が成立していく過程は、このように自分の願望を驚きながら発見していったり、家族関係や重要な人間関係の中で、愛着したり絶縁したりも含め、さまざまな思いや行動がうずまいている過程である。そして、ドラの症例もそのような中の一環であると言える。

5. ドラの治療の中断とフロイトの詩

ブローイアーの末娘ドラが重要な意味をもっていると書いているフロイトの手紙を先にあげた。症例ドラを治療する年である1900年の3／11のフリースへの手紙でフロイトは「Verbreuerung（ブローイアー化）」という造語を用いている（これは直接にはブローイアーの次女がフリースと関係の深い人物と結婚することを指して言っている）。

ちなみにフリースの妻は、ブローイアーの元患者であったイーダ・ボンディである。そして、症

例のドラの本名は、イーダ・パウエルで、フリースの妻と同名である。さらに、フリースの妻イーダは、フロイトがドラを治療している期間に、初めてフロイトと会い、話している。

以上のような、フリースやプロイアーの背後の女性をめぐるすさまじいイメージが重なっている中でドラの治療が行なわれたのである。イルマの夢の解釈をはじめとして、そのテーマへの取り組みが深められていったわけだが、ドラの治療も、フロイトにとってそのテーマの一環という側面ももっていたとは言える。そして1900年12/31に、ドラから治療の中断を申し渡される。ドラから治療を中断させられたことは、フロイトにとって大きなショックであった。「疑いもなくそれは復讐行為であった。彼女はまったく予想のつかないやり方で、治療が幸福な結末を迎えようという私の期待が最高潮に達したとき、治療を中絶して、この希望を無きものにしてしまったからである。」これは、『夢解釈』を出版してすかさずゾフィから絶交されたことをはじめとする自己分析におけるフロイトの傷をさらにえぐったのではないかと思われる。

その翌日1901年1/1のフリースへの手紙で、フリースの妻イーダと話したことを書いている。「あなたの奥さんが訪ねてきて、十数分話したことを、私は容易には忘れられないでしょう。あなたの奥さんに再び会える希望があるとしたら、それは『不幸な』ときであるというのは、なおさら悲しいことです。」「(「不幸な」と言っているのは、フリースの妻の母が病気が死ぬ時にしか再会できないだろうから、という意味である。)

その手紙でフロイトは珍しく自作の詩を載せている。「冬」と題されている。詩をうまく訳すことはできないが、以下に訳文を記す。

冬

通りは柔らかく、白く、光っており^{#1}

そして、広場には雪が積もっている

凍って、キラキラ光っている

池や沼や湖が

風が、不気味に冷たく吹いている

東から、北から

たくさんの貧しい子どもたちが寒さで泣いている

そして、保護してくれるものを、守ってくれる場所を、探し求めている

僕は今日、元気に学校に行く^{#2}

こうするのは、今日が初めてではない

背中にランドセルを背負って

脇に定規を差し込んで

(フロイト自身の脚注)

注1：この冬の初雪です(もちろん昨晚からの)。

注2：もちろん見かけだけです。彼はとても辛い思いで学校に行きます。

自作の詩にまで脚注をつけるところは、心理学者ゆえの悲しい習性であろうか、それはともかく、フロイトの思いがよくあらわれている詩だと思う。この手紙の中の詩の直前に書いているように、直接には、フリースの妻イーダと話したことを思い起こし、彼女におそらくもう会えないことを思って書いたのであるが、その背後にどんな思いが込められていることであろう。イーダ・パウエル（仮名ドラ）との別れ、フリースとの仲（実際フリースとも生涯もう会うことはなかった）をはじめとして、『夢解釈』に記されているような、自己分析のこと（出版後すぐゾフィから絶交されたこと）なども背後にあるであろう。

6. ドラ治療における逆転移と共感

逆転移がクライアントの理解や共感にとってプラスにはたらく場合もあり、それはどういう場合にいかにして可能か、ということは確かにフロイト以後、よく話題にされるようになってきている。治療者が、単に自分の思いを表明すればよいという問題でもないし、意識的に気をつけていればできることでもないし、必ずしも教育分析を受けていれば取り組んでいると言える問題でもない。ともすると治療者の自己満足、自己愛、相手を暗に支配することなどに無自覚的につながりやすい、極めて難しい問題である。が、実際、クライアントにさまざまな思いを体験させられ、それが実はクライアントの苦しみ、思いなどと同型の問題であったりし、そのことに後で気づかされ、それがクライアントを理解し共感する助けとなっていたりすることは、比較的によくあることのように思われる（操作的にできることではなく、後で気づかされる種類のことである）。

ドラにおいてテーマとなっていたこととして、例えば、第一の夢では、父からの保護を求める気持ちがあった。上の詩で、「そして、保護してくれるものを、守ってくれる場所を、探し求めている（Und suchet nach Schutz und nach Hort）」とあるが、まさにフロイト自身が、寒さに震え泣く中で、保護を探し求めている思いだったのである。ドラの第二の夢では、父の死、自分の復讐心のため父が死んだという思い、深い森で道に迷うこと、駅にたどりつけないことなどがあった。今あげたことはすべて、フロイトの自己分析においてもテーマとなっていたことである。ドラの第二の夢で、道案内を申し出る男性が登場するが、ドラはそれを断り、一人で深い森の中を歩き続ける。フロイトは、ドラから治療を終わりにすると告げられた後で、次のことに気づく。「夢の中で道案内を拒み、一人で歩くことを望んだこと、……その拒絶は、他ならぬ私がその決められた当日に体験すべきものであったのだ。」（364頁）夢の中だけでなく、フロイトとドラの実際の関係においても二人は別れ、別の道を歩くことになった。ドラに拒否された翌日の詩で、寒さに泣き、保護を求める思いを内に秘め、「僕は今日、元気に学校に行く」と書いているのであり、このような体験において、ドラと同型の体験を共有し、ドラへの共感も深まっていると思う。だが、残念なことに治療中断の後のことである。

が、例えば、フロイトは『夢解釈』第2版の序文（1908年）で、「本書は、私の自己分析の一片断、私の父の死に対するリアクション、それゆえ一人の人間の生涯における最も重大な出来事、最も痛切な喪失に対するリアクションであることが、本書を書き終えた後でわかった」と書いている（この序文は、フロイト著作集では省略されている。日本教文社『夢判断上』6頁）。父と生きて接するという形での関係は切れても、その後の自己分析の過程や『夢解釈』の執筆において、生前よりも父との関係を深めたと言うこともできるであろう。同様に、イルマの治療は1895

年夏で終結したが、その後のイルマの夢やその解釈を通じて、イルマとの関係をより深めたと言えると思う。ドラに関して同様に言えるであろう。しかもこれらは別々のことではなく互いに重なり合ったものである。実際に接するという形での関係は切れても、内面的に関係をより深めうるし、『夢解釈』やドラの論文を見ればわかるように、その関係というのは非常に多層的でひどく込み入ったものでありうる。フロイトが、夢や隠蔽記憶と取り組むことや、父の死などの重大な出来事、家族や友人や患者などとの関係を通じて、参究を深め、精神分析を築いていく過程は本当に圧巻である。

7. 魔物 (Dämon) との闘い

フロイトは、ドラの論文の終わりのほうで、次のように書いている。「人間の胸の中で、完全には飼い馴らされずに (bändigen) ひそんでいる、最も悪い魔物 (bösesten Dämonen) と闘うために、それを呼び覚ます私のような人間は、この魔物との闘いで、傷つかずにはすまないことを覚悟せねばならない。」(357頁) フロイトの文章の最も大切なところでは、「Dämon (ここでは魔物と訳すことにする)」と「Ungebändigten (飼い馴らせないもの)」という語がしばしば使われる。『夢解釈』の最後のほうで次のように書いている。「古代の諸民族において夢にはらわれた尊敬は、人間のたましい (Seele) の中にある飼い馴らせないものと不壊のもの、すなわち魔物的なもの (Dämonischen) に対する、正当な心理学的予感に基礎づけられた恭敬の念である。魔物的なものが夢の願望を生み出し、また私たちは無意識の中に再びそれを見出すのである。」(著2・502頁、強調はフロイト) フロイトの自己分析、精神分析を確立していく過程は、このような認識・覚悟にいたる過程であった。『夢解釈』出版半年後1900年5/7のフリースへの手紙で、「魔物との闘いの苦労 (die Mühsal des Ringens mit dem Dämon)」という表現を用い、自己分析が魔物との闘いであったことを述べているが、本節の最初の引用では、治療者であることは、いやおうなく魔物と呼び出し闘うことであることが述べられている。

フロイトはまた、「十字架」という表現も用いる。1900年3/23のフリースへの手紙で次のように書いている。「私に重くのしかかっているものは、ほとんど全く取り除けることができません。それは私の十字架 (mein Kreuz) です。私が担わねばなりません。そしてその過程で、私の背中がはっきりと曲がってきていることは、神のみが知っています。」フロイトの自己分析がどのような覚悟にいたるものであったかがうかがわれる文章である。

1910年5/6のPfisterへの手紙では次のように書いている。「転移に関して言えば、それは十字架です。病気における独自の意志をもつ飼い馴らせないもの (そのために私たちは間接的な暗示や直接的な催眠をやめたのですが)、それは精神分析によっても完全に片づけることはできず、ただ制限できるだけです。その残りが転移として現れます。」

転移の問題や自己を知るといふ問題は、フロイトの表現を借りれば、「魔物との闘い」「十字架を負う」とでも言わざるをえないような過程である。『夢解釈』やドラ論文はそのドキュメンタリーとも言えよう。こちらの臨床経験や人生経験が深まるにつれ、ますます多く深くのものをフロイトから学ぶことができる。本論文が何らかの意味で読者の参考になればと願い、筆を置く。

引用・参考文献

フロイトの著作は、人文書院のフロイト著作集から、その巻と頁を記した。巻を記さなかったものは、ドラ論文のある第5巻からの引用である。読者の便を考えて日本語訳で引用箇所を示したが、原文にあたり、筆者が訳し直した箇所もある。

- Abraham, H. C. & Freud, E. L. (1965) *Sigmund Freud Karl Abraham Briefe* S. Fischer
Anzieu, D. (1986) *Freud's Self-analysis Translated from the French* The Hogarth Press
and The Institute of Psychoanalysis London
吾妻ゆかり・妙木浩之編 (1993) 現代のエスプリ 317 フロイトの症例
土居健郎 (1977) 方法としての面接 医学書院
土居健郎 (1997) 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版
Freud, E. & Freud, L. (1960) *Sigmund Freud Briefe 1873-1939* S. Fischer
Jones, E. (1961) *The Life and Work of Sigmund Freud* 竹友安彦・藤井治彦訳 (1969) フロイトの生涯 紀伊国屋書店
Kanser, M. et al. (1980) *Freud and His Patients* 馬場謙一監訳 1995 フロイト症例の再検討 I ドラとハンスの症例 金剛出版
Krüll, M. (1979) *Freud und Sein Vater* C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung 水野節夫・山下公子訳 (1987) フロイトとその父 思索社
Mahony, P. J. (1996) *Freud's Dora* Yale University Press New York and London
Mahony, P. J. (1997) ああ！ 可哀想なドラ みんな彼女の病気を知っていたのに 精神分析研究, 41(2), 85-100
Masson, J. F. (1985) *Sigmund Freud Briefe an Wilhelm Fließ* S. Fischer
小此木啓吾 (1979) 対象喪失 悲しむということ 中公新書
Schur, M. (1972) *Freud Living and Dying* International Universities Press 安田一郎・岸田秀訳 (1978) フロイト 生と死 (上) 誠信書房